

167
紀 要 第四十卷 第一号（通卷五十一号）二二一三四（二〇一六）

宮澤賢治に影響を与えた妹トシの信仰

——「絶対者」を求めて——

山 根 知 子

はじめに—新資料から見えてくるもの

宮澤トシの兄賢治への影響については、二〇〇三年九月に発行した拙著『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』（朝文社）にて、トシの日本女子大学校における実生活および思想について実証的な事実確認を基礎にトシと兄賢治との関係解明に関する研究をまとめた。しかし、その後、発見された新資料によって、さらに今日までその詳細が明らかになり、考察すべき要素も加わってきた。

まず、拙著以降に発見された新資料とは、以下の三点である。これら三点の資料については、それぞれ翻刻とともに解題および論文の形で公表されており、出典は以下の通りである。

（ア）トシの日本女子大学校卒業証書（宮澤家所蔵）

…山根知子「宮澤トシの卒業証書」『成瀬記念館』No.26
（二〇一一年七月）

（イ）近角常観宛トシ書簡二点（求道会館所蔵）

…岩田文昭『近代仏教と青年』（二〇一四年八月 岩波書店）

（ウ）トシ「実践倫理」答案八点（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

…山根知子「宮澤トシの「実践倫理」答案—成瀬校長の導きとトシの心の軌跡—」『成瀬記念館』No.30
（二〇一五年七月）

これら三点の新資料から、宮澤トシの信仰およびトシの賢治への影響について、新たな考察の可能性が出てきたといえる。

その要点として、（ア）の卒業証書からは、トシの履修した科目が判明したことから、トシへの影響が明らかであった成瀬仁蔵校長以外にも、影響を与えたと思われる授業担当教員およびその影響内容について、すでに心理学・児童心理学を中心に宗教面にも及ぶ考察を「宮澤賢治—或る心理学的な仕事の仕度」と同時代の心理学との接点」（宮澤賢治の深層—宗教からの照射）二〇一二年三月 法蔵館）にて進めた。

その後、（イ）では、父政次郎をはじめ宮澤家との交流のあった浄土真宗僧侶で宗教家である近角常観の求道会館から、日本女子大学校入学当初の大正四年四月と五月の二通のトシ書簡が発見され、公開された。

(ウ)は、日本女子大学内より、成瀬仁蔵の授業「実践倫理」の課題として多くの学生の答案が発見され、そのなかにトシの答案八点があり、これらに対して現物を見て調査、研究することができたものである。これは、(イ)との関連性のなかでトシの信仰について考えるべき手があるといえる。

以上より、これらの要素を総合的に加味して、トシ自身の人生の課題として信仰への思いがいかに強かったかがわかり、再度トシ自身の信仰と兄賢治に与えた影響について考えてみると、二〇〇三年に発表した拙著におけるトシ研究がさらに補強され進展する要素があると考えられる。そこで、特に資料(イ)と(ウ)を中心に、トシの信仰の内実が具体性を帯びて浮かび上がってくることから、これらの新要素に重点を置きながら、改めてトシの信仰の深化についての過程を押さえながら考察を深めたいというのが、この論考のねらいである。さらに、これらによって、賢治の宗教性への影響について迫ることができる要素について指摘したい。その際、トシが信仰対象としての表現として「絶対者」という概念をどのように把握していたのかについても解明したい。

なお、本稿での引用文献については、トシ関係では、先の文献(ア)(イ)(ウ)のほか、トシ書簡および文章の引用は、堀尾青史によって一九七〇年七月に発表された『ユリイカ』第二巻第八号により、トシが卒業後の病氣療養中に書いた「自省録」は拙著『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』の巻末資料による。宮澤賢治の文章については、『新校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房 一九九五～二〇〇九年)による。成瀬仁蔵の文献は、授業「実践倫理」および学内行事での言葉は、『実践倫理講話筆記』(日本女子大学成瀬記念館

二〇〇一・二〇〇二年)より、成瀬仁蔵が発表した文章については、『成瀬仁蔵著作集』全三巻(日本女子大学 一九七四～一九八一年)より引用する。これら以外の引用文献は、その都度示す。

一、トシの信仰の土壌―日本女子大学校入学以前

まず、新発見資料はすべて日本女子大学校に関するものであることから、この期間に重点を置くこととなるが、ここではそれ以前の日本女子大学校入学以前について、特に信仰と思索に関する要素における整理をしておきたい。

日本女子大学校入学以前のトシの精神的な問題として、大きな挫折をもたらした事件としては、恋愛事件があった(詳細は拙著『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』参照)。トシにとって、この恋愛事件による挫折体験があつて以降の人生は、約七年半であつたが、この七年半の内訳は、日本女子大学校に入学してからの四年間と、卒業後の病氣療養生活(教員となる前と後をあわせて)二年半と教員時代の一年との計三年半であつた。二十四歳で死を迎えたトシの人生において、最後の七年半は、苦しみのなかでの試練の日々となつたが、そうだからこそ、トシの信仰を求める思いが深まつた時期であつたといえる。

そのなかで、(イ)の新資料によって、トシが入学してすぐに浄土真宗の近角常観のもとを訪れていることがわかったことから、トシに近角への訪問を勧めた父政次郎の信仰との関係からトシの信仰の変遷について確認したい。

まず、宮澤家の浄土真宗信仰および花巻で開催された夏期仏教講

習会を導いてきた政次郎の信仰について注目したい。賢治もトシも、家を離れるまで、政次郎が家庭および地域で育んできた宗教的環境のなかで信仰の基盤を形成しているからである。

政次郎は、明治三十年代以降の近代仏教運動を進めた浄土真宗関係者として清沢満之、暁烏敏、近角常観らに注目し、著書や雑誌『精神界』等の読書のうえ、暁烏敏、近角常観らを花巻の講習会講師に招いている。こうしたなかで、浄土真宗僧侶である近角常観は、明治三十六年と三十七年の講師となり、政次郎との交流が始まっている。近角は、東京本郷を本拠地として若者の悩みに応じることで布教を広げるなど、当時の仏教界で新しい試みに着手していた。トシは賢治とともに、こうした政次郎による信仰的感化を受けて基盤となる信仰心を培い育ったと思われる。

一方トシは、花巻高等学校最終学年での挫折体験を味わうまでは常に学年の首席に位置する優等生として育ったが、トシ自身が「自省録」で記しているように、恋愛事件以来、学内の教師、友人をはじめとする人間関係に大きな溝が生じ、地元の新聞でそれが「真偽とりまぜた記事」になるなど、「故郷を追はれ」る思いで上京したという経緯がある。そうした心の傷を抱えるなかで東京でのトシの精神生活はどのように推移したのだろうか。

二、「疲れし心」から絶対者を求める心へ

―大正四年度 家政学部予科

トシは、大正四年四月に日本女子大学家政学部予科に進学し、責善寮に入寮することで、故郷を離れ東京での生活を開始する。

この予科での一年間には、先の新資料（イ）の書簡二点が出され、授業では成瀬仁蔵校長の授業「実践倫理」に関する（ウ）の答案（カード）二点が書かれている。

まず、トシが近角に出した書簡二点のうち日付けの早いものは、入学した四月の二三日であり、これは政次郎が近角常観宛て書簡（四月二日）にて、トシの上京の報告と指導の依頼をしていることから、トシがこれを受けて、「明後日の日曜日」すなわち四月二五日に訪問したいとの事前の挨拶をしたためたものであるといえる。

この書簡で、トシの近角への思いを述べた言葉として、「先生の御教へに近づき得るうれしさに、望みを以て上京致し候」「常日頃よりの願ひを達して親しく御教へ受くる身となり候はゞ、この上の喜び幸福御座無く候」とあり、近角の教えに期待する思いが当時のトシの心を支えていたといえるほど大きなものであることがわかる。

私は今年十八才の至つて我儘なる者に御座候。我儘なる私を我れから持て余し居り候。はる／＼この地まで遊学いたし乍ら、将来に対する希望を持ち得ず従つて活気なく元氣なく誠に意義なき生活を致し居り候。倦怠に悩まされ候て我乍ら望ましからぬ生活状態に在り候へど、これを脱する程の勇氣も起し得ざる実情なき私に御座候。何とかして早くこの状態を脱し、積極的な充実せる生活をなし度きものは、今この疲れし心に残る只一つの望み願ひに御座候。（四月二三日）

一方の年度初めに書かれたと思われる答案「自己調査」カードの言葉には、「意志薄弱、陰鬱、消極的、其他大抵ノ短所ヲ具有ス、正直」という自己分析がなされており、この書簡の文面との関係が深いといえる。トシは高等女学校の卒業式までのなまなましい心の傷が未

だ癒えないなかで、トシ本来の性格というよりも心の傷からくる精神的な状況を正直に示したと推し測ることができる。

もう一通は、約一ヶ月後の五月二十九日の書簡で、この間に四月二五日に訪問し、それ以外にも訪問をしたかどうかは不明であるが、この書簡の最後に「明日は参上いたします」と訪問予告をしているので、五月三〇日の日曜日に訪問が実現したと思われる。しかしその書面の表現は、近角に対する期待において、前書簡と比較して変化していると言わざるを得ない。つまり、近角の著作を読んだことにも触れ、「信仰の余瀝」や懺悔録」を拝読しましても、御講話を承りましても、親様の御声も聴かれませんが光りも見えませんが告白しているのである。つまり、近角の著書「信仰の余瀝」「懺悔録」の読書と、数回の講話の経験を通して、この一ヶ月の間に、近角による救いへの期待を失いつつあるトシの思いが示されている。なお、「親様」とは浄土真宗での阿弥陀仏に対する慈悲深い親への親しみを込めての呼び方である。

その一方で、この書簡の後半には、日本女子大学校に向けての思いついて次のように述べている。

当校の主義は自動自発、研究的、人格の向上、修養、目的ある生活、など、云ふ言葉に厭になります程聞かれます。当校の先生方を見ますと、「犠牲の精神」とか「愛」とか云ふものになんて生きて、死の問題をも解決されてる様に見える先生もあるように見受けられます。一層の事この学校を批評的に見ず、自分もその中に同化してしまはふか、など、も思ひました。然し、同化する迄の努力がいやなので御座いますから、何とも仕様のない次第で御座います。(五月二十九日)

山根 知子 宮澤賢治に影響を与えた妹トシの信仰

このようにトシは、成瀬をはじめとする教師の教育方針や生きる姿勢について把握しながら、それが表面的なものでなく本物であるかどうか疑心暗鬼の思いで確認しつつあるといえる。ひるがえって、トシは自身のことを言えば、自分のなかの問題を解決したいと強く感じ、煩悶していることから、「当校の主義」に「同化」したい思いと、「同化する迄の努力がいや」であるという思いとに引き裂かれており、身動きが取れなくなっていることがわかる。しかしながらトシは、この長文の書簡の最後には、近角に対して次のように言う。

明日又、冷笑されるのを忍んで明日は参上いたします。然し、どうにも成らないと知りましたなら、(先生の御講話を御伺ひしても、私には何も力を得られないと、)今度は仕方がございませんから、向上とか何とかおっしゃる先生に依って、当ってみようかとも思ひます。これは、私の本意ではなく、本心の叫びでない事は勿論でございますが……

実際にこのような書簡を書いた翌日に、近角の訪問は実現したと思われるが、これが近角との接触の最後となり、「向上とか何とかおっしゃる先生」すなわち成瀬の導きに沿って進むこととした様子が推測される。

これらの近角とやりとりに近いと思われる時期に、トシが「実践倫理」答案の一つとして書いた先の「自己調書」カードの裏面「Belief and Conviction」の欄には、「既定宗教ニハ未ダ入信セズ」とあることが注目される。トシは、宮澤家が浄土真宗の信仰をもつ家であることや、父政次郎が花巻の夏季仏教講習会を中心となって進めるなど、熱心な信仰活動を行っており、トシも幼い頃から参加し学びを続けていたことから、浄土真宗と書くことも可能であったはずだ

が、そうはせず、恐らく成瀬による個人の信念を問う姿勢に対して、「既定宗教ニハ未ダ入信セズ」と記したのだと思われる。さらに、トシは、深い苦しみのなかにあるからこそ、真にその救いが得られる宗教への道を求めていることが確かであり、その求める方向はこれに続く文章にて次のように記している。

サレド神或ハ佛トモ名付クベキ絶対者ノ有ル事ヲバ信ジ居レリ、自己ノ不完全ニシテ欠点ノミ多キモ知レリ、故ニ何時カハ宗教ノ門ニ至ラン事ヲ期ス。(傍線引用者 以下同)

ここで、「絶対者」という表現に注目したい。この「絶対者」には「神或ハ佛トモ名付クベキ絶対者」という修飾語句が冠されていることから、「既定宗教ニハ未ダ入信セズ」「何時カハ宗教ノ門ニ至ラン事ヲ期ス」と述べるトシが、仏教、キリスト教といった宗教の枠組みを決めつけずに大いなるいのちの源となる超越者を意識して求めようとしていることがわかる。しかも、当時「絶対者」という表現を使用しているトシ周辺の身近な存在は、仏教関係者には見当たらなかった。しかも、成瀬の「絶対者」「絶対」の語の使用としては、「自然と自己 絶対者に対する信念」「家庭週報」大正四年十二月『成瀬仁蔵著作集』第三巻所収)など、大正四年度以降の発言に多く、大正五年八月に刊行された『新婦人訓』(『成瀬仁蔵著作集』第三巻所収)にも、「絶対とは何ぞや」「絶対は意志なり」といった項を立てて、絶対者に対する思想が集約されてゆく。

また、先の「自己調査」カードの裏面の「Mission」欄には、トシは入学の「動機」について「我が人格未ダ少シモ向上ノ道ニ進ミ居ラザル事ヲ覚リテ、ソノ欲求ヲ充タサン為、本校ニ入学ヲ希望セリ」と書き、人格の向上こそ自らの欲求するところであり、入学の

動機であることを示している。先の近角宛て書簡での「当校の主義は自動自発、研究的、人格の向上、修養、目的ある生活、など、云ふ言葉を厭になります程聞かれます」という言葉は、読み手を意識した内容であったかも知れないが、成瀬の人格向上を導こうとする教育姿勢に自分の欲求がまさに重なっており、そこに主体的に自己投入している意思が示されている。次に、トシは「決心」と項目立てて、「真ノ人間トナリ、真ノ女トナリ、此ノ世ニ生レ出デシ吾ヲシテ最モ意義アル生活ヲナサシメント欲ス。而シテ本校ニ於テ、ソノ基礎ヲ造ラント期ス」と、本校の成瀬の教育のなかで人格の基礎を培う覚悟を表明している。

大正四年度においてももう一点存在する答案「(態度・独立)」「(カード)では、執筆時期について推測を及ぼすと、成瀬の授業「実践倫理」の「大正五年二月七日」の講話内容が、「独立」のため「自発ノ力」による「態度」を求める話題であり、トシの記述内容と重なることから、大正五年二月七日の直後ではないかと思われる。

この答案で、「独立」について、トシは次のように記述している。

個人ガ団体又ハ他ノ大キナモノニ同化シ一体ニ成ツタ時ハ、私ノ生命ハ拡張サレ、発展サレ、大キクナッタ時デアル。コレガ個人主義ヤ孤立ト全ク反対ニ積極的ナ所デアル。独立トハ他ノモノト間ニ垣ヲ作り、溝ヲ作ルノデハナクテ、他ヲ容シ、他ト一体ニアル事ガ我が生命ヲ延シ、真ニ独立スル事デアル。

このような個人の生命の拡張についての考え方は、成瀬校長の持論であり、古くは「小さい自我と、大なる自我との間の障壁を破つて、段々に広くなり大きい我を作つて行く事が、内面から言へば自我実現と云ふ事である」(『我と云ふもの、研究』明治四二年一月

『成瀬仁藏著作集』第二卷所収) という表現をしている。これは、すなわち梵我一如の実現を自我実現とみている考え方であり、さらに、トシの聞いた「実践倫理」の授業では大正五年一月から「独立ノ態度」および「個人ノ革新」というテーマとなり、「個人拡大」「大霊トノ融合」「人格完成」(一月二十四日) という方向での話がなされている。このように、成瀬の言う「大なる自我」とは、「大霊」とも表現され、また「絶対者」ないしは「宇宙」の意志の実現の場であるとされている。これは、賢治の「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」(『農民芸術概論綱要』) という思想にも通じる重要な要素であろう。とすれば、トシの「他ノ大キナモノ」の言葉には、これらの大霊や絶対者の意志、宇宙の意志に自らの意志を一致させていこうという方向が、真の独立だという考えが示されているように。

なお、少し遡る大正四年一〇月二一日付トシ宛賢治書簡の「色々利己的ダノト自分デ辯解シテ居ラレル様デスガソナ気兼ねハアリマセンデ好イデセウ」という言葉から、それ以前にトシが自分の「利己的」であることを兄に述べたことがわかり、一年後の〈資料7〉でもトシは「利己主義」が「改メラレツ、アリ」と書いていることから、成瀬の「自己が拡大した無限絶対と合致する所に真の宗教の生命が生まれるのである」(『婦人公論』大正五年九月『成瀬仁藏著作集』第三卷所収) というような「小さい自我」を超えた真の自我実現の教えが、他と一体となりながら絶対者との融合をしていくことを目指して、トシの意識改革への実践を大きく促したといえよう。

三、瞑想による絶対者の光を求めて

―大正五年度 家政学部本科一年

トシが本科に進学した大正五年度の始まりには、四月一〇日に入學式があり、そこで成瀬校長は、初めての宣誓式を行い宣誓文を書くことについて、「先生ノ前デノミナラズ天ニ誓ッテ覚悟ヲ定メ、門ニ入ルト云フコトヲ希望スル確心ハ何デアルカ。銘々ノ決心ヲカキ、下ニ姓名ヲ記シテ生涯ニハ成就スルト云フコトニ致シタイト思フ。ノ二分間瞑想シ、父兄、保証人、先生方ノ前デ順次ニ此所ニ出デ書キ入レルコトニイタシタイト思ヒマス」と説明している。

この時、トシが宣誓文として「真実ノ為ノ勇進 宮澤トシ」と書いた筆跡が残されていることについては、すでに青木生子氏が一九八七年十月に写真入りで公開している¹⁾。

その後、書かれたと思われるトシの答案「大学生活に入る決心」が、成瀬校長のどの授業での課題に応じたものかについて、『実践倫理講話筆記』をみていくと、「五月一日」に述べられた次の課題ではないかと思われる。

何シテモ欲シイト思フ最モ大切ナ宝ハ何デアラウ。又ソレヲ如何ニ選択シテ得ヤウカ。コノ問題ハ生活ニ適切ナ問題デアツテ、コレカラ一週間中ノ問題トシテ与ヘルニヨッテ答ヲ記シ置キナサルコト、シヤウ。

さらに一週間後の「五月八日」の講話で、成瀬校長は、この課題内容を再度次のようにまとめている。

- a, アナタ方ハ此三年間ノ大学生活ニ於テ何ヲ選択スルカ
- b, 如何ニシテソレヲ獲得スルカ

これに対して提出されたトシの答案では、次のように記されるのである。

「如何に生きるか」この問題程、大切なものは私には無いのである。如何にもしてこれに満足な解決を与へなければならぬ。今後三年間の大学生活を空費するも有効にするも私の決心次第である。多くの同胞の望みて得られないこの生活を、我が最善を尽して生活し進み得られる限りどこまでも進めて行かうと云ふのが私の決心である。

先の宣誓文の「真実」として探究される対象として、トシは「如何に生きるか」という最も大切な問題を設定し、そのための「勇進」をなす覚悟へとつなげていくのである。

また、この「如何に生きるか」という問題探究の真剣さは、この年病床にあった祖父喜助への書簡のなかで次のように発露する。

それら（＝衣食住の満足・引用者注）は只この短き間のからだを養ひ喜ばせるまでにて、死後の大事に比べてはあつてもなくてもよき物と思ひ候。それよりもその人の気には入らずともほんとに大切な死後の事に御氣付きいたゞきまことの親様に救はれる様にあれこれ申し上げる方がよほど深切なる仕方と存じ候。私も大切な死後の事一刻も早く心にきめる様にと思ひ居り候へど未だ確かな信心もなく、このまゝに死ぬ時は地獄にしか行けず候（六月二三日）

すなわち、「如何に生きるか」という生への問題意識は、死後の問題とのつながりのなかで、「未だ確かな信仰もなく」と述べるトシにとっては、生死の問題を解決するための自分なりの信仰に対する渴望が募っていったと思われる。ここでは、浄土真宗を信仰する

祖父への書簡であるため、「まことの親様」という表現を使っているが、現世的な救いではなく、死後も含めた永遠の救いを真に求めようとする内容のなかで、「親様」にも「まことの」という本物を求めようとする心が現れている。

次に本科一年での二つ目の答案として「瞑想ノ目的、及経験／夏季間ノ修養ニツイテノ計画」（カード）がある。

予科入学時からトシが寮生活で黙祷の習慣をもっていたことは、トシの文章「武蔵野より」で「寮舎の一日の中では朝と夜とに黙祷とか考へる時間が与へられてあります」という記述からわかるが、さらにこの年、「瞑想」について目を開かされたことがわかる。それは成瀬が、七月二日にインドの詩人タゴールを学内に迎えるに先だつて、タゴールの信仰姿勢と思想内容の紹介に努めるなかで、「実践倫理筆記講話」の六月二八日には、タゴールの瞑想に対する姿勢を踏まえて「宇宙ノ無限ナル大生命ノ音楽ヲキクト言ッテモヨシ、無限ノ震動ヲ受ケルト言ッテモ宜シイ。夫レデ尤モ深い潜在意識ニ入ル」という深い体験が「瞑想」であるとの認識を伝えているように、瞑想に対する心の準備を経てタゴールの講堂での姿に接したトシにとって鮮明な印象がもたらされた体験があったと思われる。

そのうえで、トシの書いたこの答案の内容は、タゴールの講演直後の七月五日において出された成瀬の「実践倫理」の次の課題に対する答案であることは間違いない。

次ノ問題

- 1、 瞑想ノ目的及ビ経験
 - 2、 夏期間ノ修養及ビ研究ニ就キテノ計画ト決心
- これに対して、トシはこの年度当初に抱いた「如何に生きるか」

という問題解決への目標を再度繰り返し、「私ノ誠ノ願ヒハ、何故ニ生キ、如何ニ生クルカ、ノ問題ニ対シテ常ニ明快ナ答ヘヲナシ得ル日常生活デアリ度イ、即チ根本ニ生キ度イ、ト云フコトデアル」と確認して瞑想をしようとし、また「真ノ瞑想ノ目的ニ叶ツタ瞑想ヲシタ事ガアルカ」と自分の経験の貧弱さを自省したうえで、「絶対者」に出会う瞑想体験が次のように求められていることが書かれる。

我ガ凡テヲ投ゲ出シテ打チ俯スベキ絶対者ノ前ニ、語り、ソノ光リニ照サレル事ガ瞑想デアルト私ハ考ヘル。ソノ様ナ経験ヲ曾テシタ事ノナイト云フ事ガ無上ノ悲シミデアル。サレバ私ハ、形ハ瞑想デアツテモ真ノ私ノ望ム瞑想マデハ行ツテ居ナカタ。今私ハ何故コレガ出来ナカタカ、ソノ原因ヲ探リツ、アル。集中シナカッタ事、雑多ノ枝葉ノ事ニ余リニ囚ハル、事モソノ原因ノ一デアアルガ最モ大キナモノハ、私ノ絶対者ニ対シテ未ダ殆ド研究シテ居ナイ、知ツテ居ナイト云フ事ニ帰スルト思フ。ここで「絶対者」について、光を放つ存在として表現し「ソノ光リニ照サレル」ことを望んでいることに注目したい。

また、トシが書いた「夏季節ノ修養及ビ研究ニツイテノ計画ト決心」の課題の答案部分で、その瞑想によって「絶対者ヲ知り、此ノ今ノ小ナル私自身ヲ包容スルトコロノ根本ノ力、絶対者ニ是非触レタイ。包容サレ度イ。ソレニヨツテ凡テノ日常生活ヲ営ム事ノ出来ル力ヲ得、ソレニヨツテ生カサレ、大キクサレルソノ経験ヲ是非味ハナケレバナラス」と決意している文章では、「絶対者」に「触レタイ」「包容サレ度イ」とある。

このように、トシが瞑想で感じうる「絶対者」について、光として照らしてくれて、また「絶対者」に触れる感覚や包容される感覚

を得たいとするのは、どのような発想からきているのであろうか。

この点について考えるとき、前述したように、成瀬校長がタゴールの七月五日の講堂での講演に際して、この前後にタゴールの話および瞑想の話を頻繁にしていることとの関係が強いと考えられる。

ちなみに、タゴールについては、大正二年にノーベル文学賞を受賞したことから、日本でも前年の大正四年には出版されたタゴール関係書が増えている。そのなかで、大正四年五月に出版された『タゴールの思想及宗教』（日月社）は、浄土真宗の寺に生まれてのちに仏教学者となる江部鴨村が執筆した著書であることから、注目に値する著書である。成瀬の所蔵本を記した『成瀬文庫目録』⁽²⁾のなかに記載がないため確認はできないが、来日前からタゴールへの興味をもち研究熱心であった成瀬が読んだことが想定される著書であるといえる。その江部鴨村の「タゴールの神」と題する文章のなかで、「タゴールの神は優婆尼沙土の所謂梵^{ブッダ}そのものである」とし、「宇宙の統一的原理」であり「宇宙意識」とも称されている。その霊的意識は「内部と外部、空間と人心とを貫き流れている全的意識」であり、その調べに合わせて生きることと自由と調和が普遍的に与えられるのだと論じられている。成瀬校長は、元牧師であったが、明治三十四年に日本女子大学校を創設する際には、「凡ての人心に通有せる宗教心」（『女子教育』明治二十九年『成瀬仁蔵著作集』第一巻 一九七四年六月）を養う教育を目指していたがゆえに、タゴールが瞑想によって各宗教の根底をなす宇宙意識をあらゆるいのちのなかに感受し認めようとする信仰には共感するところが大きかったといえる。

また、トシの表現において、絶対者の光という表現をしている点

においては、タゴールが来校するに際して、タゴール自身が瞑想の心持ちのなかで光として絶対者に触れた際の光についての表現を、成瀬校長の話からも知る機会があったのではないかと推測される。そのタゴールの体験とは次のようなものである。

私はかくも永いこと世界を外的ヴィジョンでのみ見てきて、だからそれを宇宙的な歓喜の相で見ることができなかった。ところが突然に私の存在の最も内奥にある深みから、一条の光が出口を見つけて広がり、私のために全宇宙を照らし出した時、それはもはや事物や出来事の積み重ねのようには見えず、私の眼にとつては一つの全体として開示されたのだった。この経験は、まさに宇宙の心臓から溢れ出て空間と時間の上に拡がり、そこからまた反響を返しながら喜びの波として源へ流れ戻ってゆくメロデーの流れを私に告げるように思われたのである。³⁾

こうした絶対者の光に照らされることを望んだトシは、七月一日に終業式を迎え、最上級生が八月の一週間、タゴールとともに軽井沢三泉寮で瞑想の時を過ごしていることを意識しながらも、花巻に帰省する。この夏の休暇が終わって、その体験を振り返って書いた答案「夏期休暇中ノ経験」(カード)では、トシは、自分の意志の弱さのせいもあり、自らの内心の実体あるいは本体とも呼ぶ絶対者に触れる機会を得ず、実体験としての手応えが得られなかったとしている。そんななかで、辛うじて「休暇ノ終リニ近イ頃」、次のような兄賢治による「暗示」があったことは注目に値する。

今一ツハ或一日偶ナク「ママ」モ敬愛スル兄ヨリ或暗示ヲ得タ。ソノ形ハ定カデハナカッタケレド僅カニ光明ヲ認メテ帰校シタ。この夏の休暇において、賢治とトシが花巻の実家とともに過ごし

た期間は極めて少ないと考えられる。つまり、トシが帰省していた七月から九月までの間では、賢治は第一学期終業日が七月二〇日であったことと、七月三〇日に上京し八月一日から三〇日まで、東京でのドイツ語講習会受講し、その足で九月二日から九日までの秩父、長瀨、三峰地方の土性・地質調査見学に参加していることから、二人ともが実家にいた可能性のある時期は、七月下旬のみである。この東京でのドイツ語講習会の受講については、『家庭週報』第三七三号(大正五年六月三〇日)の「講習会だより」に「独逸語夏期講習会 七月一日より三十日迄及び八月一日より三十日まで神田仲猿楽町十七東京独逸学院に開催」とあり、賢治は後者の八月に参加していることから、トシがこの講習会の情報を伝えたのではないかと推測される。一方、二人の第二学期始業日は九月一日の同日であることが確認できることから、このカードでの記述通り「暗示」は「休暇ノ終リニ近イ頃」に得たのであれば、「或一日」とは九月九日か一〇日しかなく、すれ違いかもしれなかった日に偶然にも接触ができたというのであり、またトシが賢治の東京や秩父での体験から得た思いを聞いたことも推し量られる。

その思いは、「暗示」として、トシの心に「光明」を与え、次の段階への足どりを確かなものとしたことが、次の答案「第二学期ノ決心及希望」(カード)に示される。

そこでは、第二学期開始後において、次のように先の暗示の体験から書き起こされている。

休暇中ノ或一日、暗示サレタソノ光リハ、帰校後種々ノ刺激ヲ得、又考ヘル事ニヨッテ漸ク明ラカニナリツ、アル。

このあと、トシは「空想的ニ求メル時代ハ過ギタ。ドウシテモ経

「驗シナケレバナラス」と、体験を重視する言葉を書き付け、また「我ト他人、或ハ我ト物トノ間ニ築ク垣ヲ破リ、凡テト喜ンデ融合シ得ル者トナリ度イ。凡テノ生アルモノヲ我ガ同胞ト愛シ尊敬シ得ル時ノ来ラン事ヲ熱望シテ居ル」と、生きとし生けるもののあらゆる生命への愛という感情が芽生えていることに着目すべきだろう。つまり、このカードの最後を締めくくる「現在ハ、コノ絶対者ヲ知ラントシテ、ソノ途中ニアル」という認識の段階において、「絶対者ノ光明ニ輝サレ」ることを望み、あらゆるいのちとの融合のうちにそれらのいのちを愛する体験への熱望が湧いてきているといえる。

こうして、のちのトシの書いた「自省録」（大正九年一月二月執筆）に登場して注目される九月二七日の「実践倫理」「大学部第二学期計画発表会ニ於テ」で、成瀬校長に出された「教育トハ何ゾヤ、宗教トハ何ゾヤ」という課題に、トシは「忘れもしない二年生の秋、実践倫理の宿題に「信仰とは何ぞや教育とは何ぞや」と出た時私は可成り長い論文を書いた」（「自省録」とある答案の時期に至る。残念ながら、この答案は今回の発見資料のなかには存在しなかったのだが、先の「暗示サレタソノ光り」が「漸ク明ラカニナリツ、アル」なかで、その光から信仰と教育についての論文中にも積極的な意味が見出されたはじめた答案であったと想像される。

こうした本科一年の後半において実践倫理の答案にますます心をこめて自己投入するなかで変化しつつあるトシの姿が、次の一二月一二日に書かれた「自己調書」（カード）に記され、相変わらず「意志薄弱ナリ」という表現もみられるが、一方「徹底セズトハ云へ、信念生活ヲ考へ、行ハントスルコトニヨリテ、利己主義、又、怯懦ナル習慣ハ改メラレツ、アリ」との肯定的表現も記されている。こ

うしてトシは「自己肯定シ自信ヲ固ム」という進行中の目標に手応えを得て、自己否定から自己肯定に向かおうとする様子を表明している。

四、信念生活の道へ―大正六年度 家政学部三年

大正六年度の新年度を迎えた四月、新学制に改められたことで、トシの学年は三年生となる。この年度におけるトシの資料は少ないが、二点のみ触れておく。

一点目は、この年、九月一六日の祖父喜助の逝去後に書いたと思われるトシの「料理ノート」のメモである。前年の祖父への手紙以来、トシは祖父を見守りながら自己の生き方を模索していたが、祖父の死後、「ついに臙脂げながら私の行くべき道を認める事が出来た即ちやはり信念生活を最もよく生活する外にないと知った」との言葉を記している。また、この体験を、祖父という個人のみならず、万人の祈りへと愛をもつことのできた体験として意味づけていることは看過できない。

二点目として、一月二七日、トシが母宛書簡の記述で「あたりの人たちを見るといろいろ自分で新しがつたり、利己主義を構へたりさまで御座います。私は人の真似ハせず、出来るだけ大きい強い正しい者になりたいと思ひます。御父様や兄様方のなさる事に何かお役に立つやうに、そして生まれた甲斐の一番あるやうにもとめて行きたいと存じて居ります」と書いていることは、家族へ堂々と自分の生き方についての価値観と意志を伝えることができる心境に至ったことがわかる。

五、信仰に根ざした天職の目覚め

— 大正七年度 家政学部四年

最終学年に入ったトシは、体調を崩したあと、六月二日から七月八日まで五通の書簡で体調の回復を実家に報告し、七月一〇日の終業式のあと、一三日に帰省している。また八月には、最高学年として軽井沢夏期寮に参加していることが、成瀬記念館所蔵の写真「軽井沢夏期寮にて」に映ったトシの姿によって確実である。

この年の九月、成瀬校長はパンフレット『女子教育改善意見』を出版する。次の答案「『女子教育改善意見』を読んで」は、その発行後まもなく書かれた答案であると思われる。「実践倫理講話筆記」は、大正七年度は存在しないため、授業内容との関係は確認できないが、『家庭週報』によると、成瀬は第二学期始業式にも、『女子教育改善意見』の内容と重なる女子教育の理想遂行と自覚への呼びかけをしていることがわかる。

そこで、成瀬が『女子教育改善意見』を読んだの課題を提出するようにと指示したと思われるが、この年度では答案「『女子教育改善意見』を読んで」が提出されている。

トシは、この答案において、「第一 女子教育改善意見ヲ読ミタル態度」から「第六 批評及確信」までの六項目を自ら作り、成瀬の著書の内容を客観的に整理しつつ、それが自己自身の考えとなり覚悟となる心境を募らせる表現を随所に見せながら展開している。

特にこの答案の冒頭で「女子教育改善意見ヲ真ニ読マウトシタ事ハ疑ヒモナク私ノ思想ノ（根本的ニ云ハバ生活ノ）一大革命ノ動機トスル事デアッタ」という意欲を強調していることは、読んで共感

や充実感を得、それが自己自身の使命の発見と生き方を変革する覚悟につながったという思いの反映であろう。また、本書では女性としての「天賦の性能」を生かして「使命」と「天職」を全うする道を導くことだと繰り返し書かれている。とりわけ「天職」について成瀬が「功利的打算に依らず、吾人が生れ来りたる使命を自覚し、其の使命を行ふことに依りて家庭国家社会に奉仕し、世界人類に貢献し、以て理想的善の根本要求を満足せしめんが為の生ける活動を導く作業を天職といふのである」（『女子教育改善意見』『成瀬仁蔵著作集』第三巻）と書いていることを受けて、トシは「女子教育改善意見ハ特ニ女子ノ特質發揮、女性トシテノ天職遂行ヲ目的トス」と本書の主眼を捉え、女子自身がそうした目的に対して「コノ重大ナル使命ヲ担フベク高キ女子高等教育ニ耐エウルモノトナルベキデアル」と自己変革の必要性を述べ自らに課すのである。

答案の最後を、トシは「女子大学ノ建設ハ我々共同ノ責任デアアル」とし、その「責任ヲ負フニ相応シキモノニ自ラ成リ度イト希フノデアアル」と自らの覚悟の言葉で締めくくる。その「責任」への思いは、二年後に、心の傷を乗り越えて母校花巻高等学校への教員となり女子教育に携わることへの内面的動機につながった可能性は高い。

こうしてトシは、一月二四日付父宛書簡では、二一日に行われた休戦祝賀式での成瀬校長の話があったことを伝え、そこに同封された賢治宛書簡には、成瀬校長を天職を遂げている人物として「現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などを忍ばれて四十年一日の如く教育に我を忘れらる、校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候」と書き、自分も「天職」を「見出し度く存じ候」という思いに至っており、成瀬の天職に生きる姿につながろうとしているといえよう。

ここに明解な表現はないのであるが、トシの『女子教育改善意見』を読んで」を書いたなかに「私ノ思想ノ（根本的ニ云ハバ生活ノ）一大革命ノ動機トスル事デアッタ」とある「一大革命」は、天職を見出し、女子教育を自らの使命とするという考えにつながったのではないかと考えられるのである。

成瀬は、「今後の宗教と教育」と題して『家庭週報』に大正五年十一月から大正六年二月まで連載し、「真の宗教と真の教育の目的とする自己の発展は必ず一つに帰するのであつて、将来は教育と信念とは決して離るゝものではないことを信ずることが出来るのであります」と述べており、トシは本科一年次にこれを読み、またこうした成瀬の主張が話されるのを聞いた可能性もあるのであるが、実際には本科三年次の卒業を前にして自らの卒業後の生き方を考える段階に入つて初めて、宗教を求める問題と、教育への道が天職として結びついてきたといえるのである。

こうしてその後の一月二〇日に、トシは病に倒れ、永楽病院に入院したため、翌年一月に告別講演をする成瀬の姿を見守ることもできずに、退院とともに三月三日に花巻に戻ることになり、翌日三月四日には成瀬が逝去する。ここに、自らの病によつて一旦途絶えかけた使命感は、成瀬校長の逝去によつて再び自覚され、答案に書いた女子教育を引き継ごうとする思いが、療養生活を経た約一年後の「自省録」を書くまでに、密かに熟成していったものと思われる。卒業後のトシは、大正八年三月から地元花巻での療養生活を送り、大正九年二月には、「神」「实在」「絶対者」「宇宙」「自然」「光明」「火の光」など、絶対者とながら言葉が多くしたためられた「自省録」を書き上げた。

こうして自ら過去を振り返り信仰への思いを確認したトシは、大正九年九月下旬から大正十年九月十二日付け退職まで、わずか一年ではあったが、母校花巻高等女学校に教諭心得として勤め、家事と英語を担当した。この間、トシが女子教育に力を注いだのは、成瀬の信仰と教育への思いをトシなりに継ぐものとして実践されていたことが推測されるのである。

おわりに―賢治の宇宙意志とトシの信仰

以上のように、このたびの新資料から明らかになってきたトシの信仰について考察を進めてくると、日本女子大学校時代のトシの心の軌跡には、注目すべき重要な三点の要素が大きく浮かび上がってきたといえる。

まず一点目は、トシが日本女子大学校入学までは仏教関係者の深い導きは得ていたものの、自己否定したままで救いを求めることはできないと知り、成瀬によつてあらゆる宗教の根底にある絶対者に直面する信仰に導かれることで、少しでも自分を見つめつつその開かれた信仰に生きることを求めようとするようになったという点である。

二点目は、タゴール来校前後に、成瀬によるタゴールの紹介や成瀬自身の瞑想への勧めがなされたことによつて、トシ自身の心に、瞑想によつて絶対者にありのままの姿を肯定され包容される感覚的な直面の実感を求める渴望が生まれ、それを光に包まれるイメージとして求め、それらの点について兄賢治との会話をしてその思いを共有していたことが確認されたことである。

三点目は、トシは、成瀬が真の信仰と真の教育との関係を重視して説き、自らも絶対者への信念のうちに天職を全うする者として女子教育を実践した姿を見せたことに尊敬の思いを抱いて、自らも女子教育を使命とした内心が、初めて認識できたことである。

このように新たに見出すことのできた、こうした成瀬校長の導きによるトシの精神世界は、兄賢治に対する影響として、どのように明らかにされてくるだろうか。

まずは、トシが希求した絶対者への開かれた信仰姿勢は、のちに顕著になる賢治の「宇宙意志」に対する信仰姿勢に流れ込んでいることが指摘できる。

さらに、トシの信仰と教育に対する使命への自覚と実践についても、トシの花巻高等女学校教諭への着任から約一年後に、賢治が花巻農学校の教諭となり、のちには羅須地人協会で農民の青年を育てる使命を担ったことへの思いと深いところで通じていくことが新たに指摘できる点である。

以上のようなトシから賢治への影響については、今後さらなる確認および考察の課題を残すが、このたびの新資料は、トシの絶対者への信仰姿勢を介しての賢治の信仰姿勢の本質に迫る研究の重要な架け橋となるものであったということができる。

注 (1) 『女子大通信』 No. 四六八号 一九八七年十月 『近代史を拓いた女性たち』 (一九九〇年六月 講談社) に収録。

(2) 『成瀬文庫目録』 日本女子大学図書館 一九七九年十一月

(3) 「わが回想」『タゴール著作集』 第十卷 一九八七年三月

第三文明社

(やまね ともこ) 本学 文学部 日本語日本文学科

キーワード 成瀬仁蔵、タゴール、女子教育